

第22回グラフィックアート『ひとつぼ展』 公開二次審査会 REPORT



Guardian Garden
PRODUCED BY RECRUIT

「本」を素材にした完成された魅力のある作品 審査員の満票を得て見事グランプリ受賞 グランプリ受賞 飯田竜太

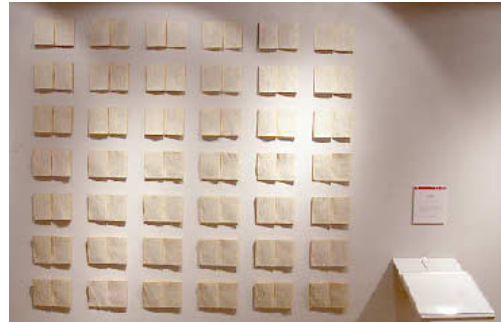
日時 2004年2月19日(木) 18:10~20:30

会場 リクルートG7ビル B1セミナールーム

審査員 50音順・敬称略
佐藤晃一(グラフィックデザイナー)
ヒロ杉山(イラストレーター/アートディレクター)
米村 浩(アートディレクター)
渡邊良重(アートディレクター/グラフィックデザイナー)
大迫修三(クリエイションギャラリー-G8)

出品者 50音順・敬称略
ASADA 飯田竜太 栗原甲吉 高松徳男 原田俊二
樋口佳絵 藤岡良枝 ふじめゆきよ 本瀬研太 矢野大二郎

会期 2004年2月16日(月)~3月11日(木)



緊張のプレゼンテーション

大勢の観客が見守る中、第22回グラフィックアート『ひとつぼ展』の公開二次審査会が始まった。まずは、展示作品がスクリーンに映しだされるとともに、出品者による2分間のプレゼンテーションが始まった。プレゼンテーションの要旨は以下の通り。

ふじめ

元々私は、小さい紙で描くというより、紙でなくとも上手に描けないので、それでも額縁で飾れば立派に見えるかと思いついて、額と絵をコピーで出して展示した。個展では、ヨーロッパの美術館みたいな豪華めの展示と分厚い本を作ろうと思っている。



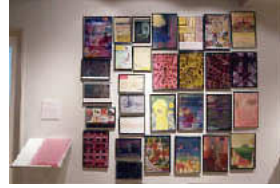
原田

人工的に作られた広いシンプルな空間はとても美しいと思う。だから直線を使った室内画を描くことにしたが、直線を少しゆがませたり遠近法を微妙に崩してみた。それは、完全なものよりも見る人の想像力が膨らむと思ったから。美しさや面白さのバランスを意識するのが大事だと思っている。



藤岡

鉄を使って「メタル・スカルプチュア・キット」を作っている。「何かを作るための材料である」という性質と、「作品として完成されたもの」という性質をもつ作品を作ってみようと思った。個展はこれを並べるだけでなく自分の中で新鮮な感じがするので、なるべくこれだけではやりたくない。



矢野

作品に特にメッセージはなく、自分の好きなものを描いている。移民とかジプシーみたいに、つねにさまよって変化していけたらいい。将来は音楽と写真と絵が好きなので、それで食べていければいい。



樋口

たまに思い出す事柄や些細な事ではあるが人の気持ちとしては大切ではないかという気分を描きたい。子供であるがゆえに感じたかゆさとかを、今も変わらない素直な気持ちで描けたらいい。個展ではタブローを中心に展示したいと思っています。



本瀬

段ボールを折り曲げたり丸めたりして、動物や人間の形を作っている。動物の形とか動きは人間とは程遠かったり、逆にしぐさが似ていたりするのが見えて面白。これからはそういう単純な感激を作品にしたい。



ASADA

個人的な悩み事に捕らわれて引きこもりがちになっている時も、世間は日々ニュースがあり、夢が現実から分らないゲームの中に自分があるように思えた。それならば、自分の悩みを解決するために、登場人物の一人になりきって戦うことが早いのではないかと、自分戦隊ASADAとして表現した。



栗原

タイトルはギリシャ語で「美しい秩序」を意味する。今回は秩序ある世界の中に存在する美しさを意識して、例えば、花をモチーフにした作品では、花の本質的な魅力は秩序正しい四季の移り変わりが根底にあって、それを意味する言葉と併せることでより絵の本質的な魅力が表現できると思い制作した。



高松

元々写真をやっていたけど、イラストは始めて1年くらいいろいろの面白いものがあり、それを自分の中で整理していったものが今回のイラストレーションになった。個展では、エロティックなものを排除して出来るだけ洗練した感じでやっていきたい。



飯田

本は目の前にあると聞くという行為が発生するが、その行動を起こさせないことで新しい情報に作り変えることが出来るのではないかと考え、本のページを一枚毎にカッターで割って刺繍を組む変えることをした。タイトルの「目に見える、見えない」とは「この本が本来持っている情報が見えない」ということが見える」という意味。



「ファイルに比べて、展示で失敗した人が多い」

緊張のプレゼンテーションが始まり、審査員による審議に移る。「今回の一次審査では得点が上位の方では色々入れ替わって、この出品者が選ばれた。というのも、上位の方でも『前に見たことあるな』と思えたのが多かったから。プレゼンを終えた後でも審査員の意見もばらばらなのは、と大迫さん。それぞれの審査員の全体の感想は、「普段広告の分野にいるが、本当は美術大学出身として眠っていた本能を呼び起こしていた。自分にはないものを持っている人に魅かれるので、ある意味今回の出品者たちにジェラシーを感じて刺激を受けた」と米村さん。ヒロさんは「一次審査でのファイルでは、過去の作品は面白いけど出品作品はいいんだけど、見せ方で失敗している人が結構いて、その辺をどう読み取ればいいのか課題だった。作家の将来の可能性もふまえてグランプリを選びたいと思う。渡邊さんは「ファイルで見えた印象に比べ展示で見えた人が結構いて、そこが残念。佐藤さんは「前回審査した時はいい押しと感じた人がいたが、今回はない。審議の中で考えていこうと思います。」そして、各作品への講評に移る。

「今回は、ふじめさんの作品に対して、「額縁に焦点を置いたのは面白いけど、中に入っている絵で勝負しないと一枚一枚の絵が目に入ってこない」とヒロさんが口火を切る。額縁の問題は作家が成長する過程でひとつのテーマになる時期があって、彼女は今の時期なんだと思う。彼女の場合は、額縁に一種のアイロニーがあって絵のテストにあっていいので信用できる」と佐藤さん。渡邊さんは「ファイルで見えた時に比べ絵が見えてこないのと、全てがコピーというのが平面的になっていて弱さを感じた」とコピーについて言及。それについて佐藤さんが「彼女はこのペラペラな所が気に入っていて、素人っぽいところと違っているんですよ。すごい微妙な難しい問題」と述べた。続いて原田さん、「ファイルで見えた時にこれは模型なのか描いているのかと議論になったけど、展示を見たらそういう感じがあったのかわからないのが残念」とヒロさんが言うと、「コピーの感じがとても硬質に見えてしまうね」と大迫さんも同意見。「窓から山が見える作品があるが、絵を描いている位置から見ただけではなくて、窓の正面から見た山の景色が描いてあった。これは彼の言うようにパースペクティブのずれということに合致してないけど、実は本人も気づかずにだまされている。意図的な部分を自覚して使い分けられるようにしなければいけないけど、まだまだは至っていない」と佐藤さん。続いて、藤岡さん。「難しいのは本人がこのシリーズは終わったと考えていることと、これから何が出来るのか分からないということですね」と大迫さん。作品を収めていた木の箱について、ヒロさんは「鉄の作品だけ飾ってあと彫刻に見えるの、箱がつくことでレリーフみたいな作品に見えてしまう。佐藤さんも「通常のような造形物というところに魅力があったのに、この箱で損している。審査員は否定的。渡邊さんは「私はこれがモデルキットとは思わず単なるオブジェに見え、意図が伝わらなかった。逆に、例えばパンツのキットとか想像できるものであれば面白かったのかな」と述べた。次に矢野さんの作品に対して、大迫さんが「ファイルでいいと思った作品と、実際に選ばれて展示した作品にギャップがあった。それについて佐藤さんが「絵を描くというセンスにおいては輝かしくないものがあってもいい。現実世界との関係のセンスということが壊れるんだ」と言うと、米村さんは「力を引き出すのはアートディレクターの仕事だから、原石として魅力があればいいんじゃないかと思う。ファイルの中にはダイヤモンドが沢山あった」とアートディレクターの視点から意見。逆にヒロさんはアーティストの立場から、「やっぱり作家として一人立ちするためには自分何かが求められるかと、世間とのつながりが重要になってくると思う」と言及した。続いて、樋口さんの作品について、渡邊さんが「センスも才能もあるけど、新しさを探そうとしてほしい」と思った」と感想を述べると、佐藤さんは「このコンペには向いてないんだよね(笑)」。絵はすごく上手く、こういった絵の良ささ美術の歴史の中では確立されてい

佐藤 / 飯田 高松 藤岡 (ふじめ 樋口)
ヒロ / 飯田 高松 ASADA (ふじめ 原田 本瀬)
米村 / 飯田 高松 藤岡 (原田 矢野 ASADA)
渡邊 / 飯田
大迫 / 飯田 本瀬 ASADA (樋口 藤岡)
*()内は本瀬

集計すると、飯田 / 5票 高松 / 3票 ASADA / 2票 藤岡 / 2票 本瀬 / 1票

渡邊さんはグランプリとしてふさわしいのは一人だけしか選べなかつた。「飯田さんが満票になったのですが、議論します？ 余地がないですね」と大迫さんが言うと、「僕は高松さんと飯田さんだったらいいです」と米村さん。他にも反対意見は挙がらない。じゃあ、今日は議論の余地はないですね。では、第22回のグランプリは飯田竜太さんに決定」と大迫さんがまとめていると会場に拍手が起こった。「自分を信じてやってきた者が良かったと思います。続けてきたこの作品は、自分が問題視出来ることが多かったからやってきました。ありがたうございました」と飯田さんが受賞の挨拶。

「運が良かったからグランプリになった」

審査会終了後、出品者に感想を聞いた。原田さんは「かなり緊張して疲れた。人がいない方がいいと言われたが、これでやるのではなくもっと上手に描く方法を考えたい」と言葉を選びながら話してくれた。同様に手法を変えるというのと語ったのはふじめさん。「原画がひどいと言われたことがあるので、あくまでもカラーコピーの質感にこだわりたい。プレゼンはセリフを考えただけの、とても緊張した」とはにかみながら話してくれた。矢野さんは「自分勝手に作品を作ってきたので、何か評価されたいと思って応募した。今日言われたことは、取り入れるのも変えないものがある」とプレゼンと実際に選ばれて展示した作品にギャップを感じたのはファイナルではなかったと思っていてこのコンペに力が壊れるんだと思う」と言うと、米村さんは「力を引き出すのはアートディレクターの仕事だから、原石として魅力があればいいんじゃないかと思う。ファイルの中にはダイヤモンドが沢山あった」とアートディレクターの視点から意見。逆にヒロさんはアーティストの立場から、「やっぱり作家として一人立ちするためには自分何かが求められるかと、世間とのつながりが重要になってくると思う」と言及した。続いて、樋口さんの作品について、渡邊さんが「センスも才能もあるけど、新しさを探そうとしてほしい」と思った」と感想を述べると、佐藤さんは「このコンペには向いてないんだよね(笑)」。絵はすごく上手く、こういった絵の良ささ美術の歴史の中では確立されてい

どころじゃなく緊張していたので、.....よく聞き取れなかった。でも本当に楽しく制作しています。展示できる機会は少ないので、ここで飾れる良かったです」と言った後「これ、いい人そうコメントですか？」と照れながら付け足した。唯一悔しさをしたものはASADAさん。「やるからにはグランプリだと思っていたので、悔しい」とにかく私の作品は現代社会と関わっていないと存在しないので、近所の人に見せるレベルでもやり続けたい。まだまだ精進します！と、プレゼンの人に感謝の言葉を何度も答えた。飯田さんに「自分も歩いてきた高松さん、3票もいただいた認められたのかなと思ってる嬉しい。展示したのも初めてでしたが、展示向きでなかったけれど納得した」と結果的には満足そう。そして、グランプリの飯田さん。「自分のコンセプトが見えなくて解決できなかったら、これで直してあげよう。グランプリに決まったのもたまたま運が良かった。ただ今更だ思いますが、グランプリに決まってもいいと思っています。でも、来年の個展は思いやりますよ」と、冷静に受けとめながらも個展に向けての意気込みを語った。「作風や手法も様々な10名が集まった今回の『ひとつぼ展』。その中から満票の支持を得てグランプリを獲得した飯田さんの1年後の個展に期待したい」と

文中一部敬称略 取材:文/ガーディアン ガーデン